

都鄙物語



四

~13
4412
4





都鄙物語卷之四

團九郎宗之入の娘を金鞠逸平と託

是より向文永三年（1192）豫金持軍涉謀叛露頭して味方せ

武士流室人も皆あゝ小落失る布小出母の国山縣の住人

本田悪太郎支之といふもの二男一團九郎宗之といふもの密

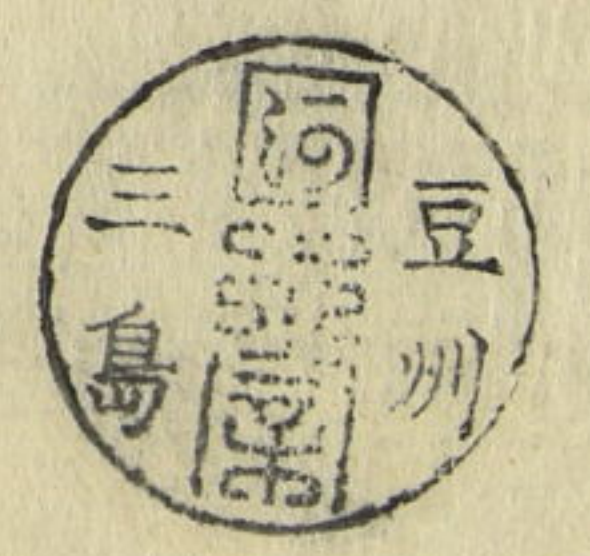
小出母の別り加はり何れも何れも事と申し連れの働を

し名を致して栄耀栄花ふくむとのと申しと云はるが乍

以後及落頭して今又身の重なりあき這り吟ひつゝこ小病

何中ふくふ妻あゝ三女をうりの女子を物と具よ落魄何るきけり

が何しきるものききり様あや有らん團九郎が妻幸小中といひ



都鄙物語卷之四

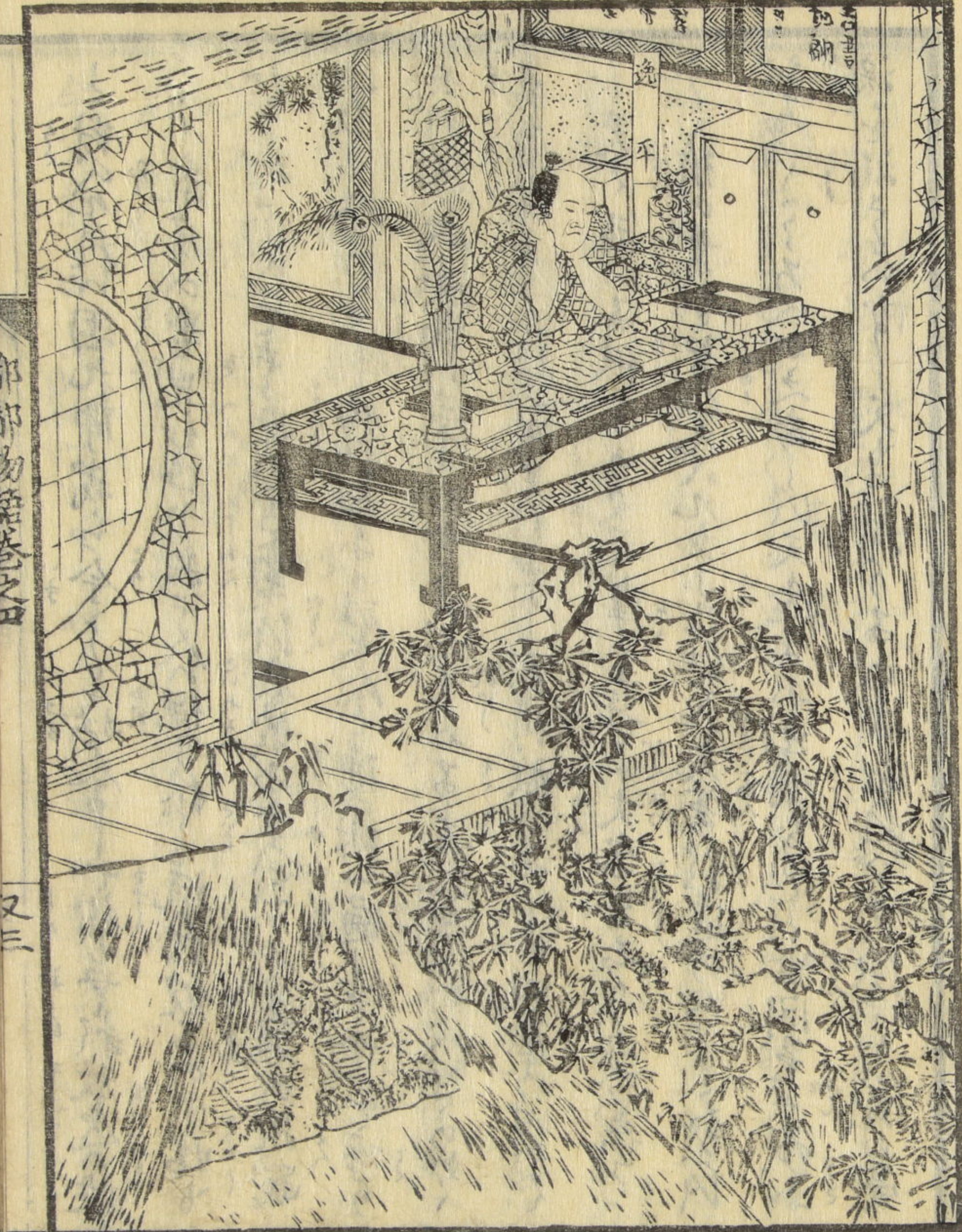
その日の夕方終ふころあく事なれ鬼をも敗くへき困たふれ
 ともまあのまのれの悲しきへ有る女子を傷おのどたう
 人とあはべき策もあく術もあつて憫れあつて風事心い
 出せし申ありて海の深ねを谷とつへる所己が同国は店の人小
 金鞠逸平とて死なれた大名の家の子ありしが主のめ状とらるる
 を歎死のあつてびん珠を傲とつども却て我を侮と憤アそ
 一回をそそ珠を用びて死なれよりそそ暇をこして白晝に武芸
 を為し妻子をつねる終小國の界をこたれ今は鎌倉町小末
 住居して二君小仕うるを愧て初めの童蒙小書筆を教導して
 公教ふくし居るるが去年一子松丸病かりてさ法しがこつ又

妻あるまの瘦の病をゆく是も長月のす病亡人の影あへ入
 小丸は金鞠のえま儉約賢素の人あつてつひ小貯収所の成宝
 ありあつていれども今ふてい穰るる妻もあつて心細くも終二人
 の亡泣を弔ひ佛の祀善なり化事ありけるが何の日の黄昏二人
 の童女携へ金鞠が宅よりありて對面を乞逸平出迎へるそそ金と
 れは是我同僚の人ふて本田悪太郎が一息困九良之を於客とや
 つくくつとつとけまび金鞠内むおむひらるる又悪太郎はこれまづ
 教度の戦ひよ人はおれを泣しえのおけは船の新状もまへ人小
 下らざり人あつて二人の子は不肖ありとせうし今新漂泊
 して俺り對面を乞まづそ昔趣を尋んとさつひさし度まのり

後足下と俺の同寮の好者といふも某の子細者で國を遊ばすの
 癖は此來より浪人の業をあたは足下又向來の屋敷者といは強倉
 へ入り給ふや國九良對し某も屋敷者といは土へ來れどもお然し
 此の屋敷者といは浪人といは浪人といは浪人といは浪人といは浪人
 を慕つて來り及ぶがごとく此の近曾りまうりて侍り某これより
 法國を巡りて下りたま家仕へ一回ま書をひらく人と欲すれども
 何ぞとてんは小兒足下とてありておのふおぼやといはがくば
 足下は小兒を養育し給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
 たり陰篤の人といは給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
 憂事の死別お心替りたるお節といは責て人の子なりとも書

育かばす傍の力なきもあまやうに足下はけしと風もこころ
 付し由へお對し給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
 て御あふしへその憂小給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
 小兒を遣は給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
 小書も見も失ひて侍り給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ
 我書育あま人の是すこころいふにんこころいふにんこころいふにん
 ども今足下の動作もまことまことまことまことまことまことまこと
 俺もいふにんこころいふにんこころいふにんこころいふにんこころ
 むろそのあふしへ侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り
 ぞくぞくは方へ侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り

115
44/2
4



都都物語卷之四

又三



都都物語卷之四

三

團九良

團九郎

金鞠子

一子

記

團

と對へられぬ困九郎我ら今と仕合して我も子孫放逐の位
 あり乳房の嬰児をゆり殺す人の保られぬも流石の親子の悲情も
 だがごとくしてきぬのき業は庶幾不幸いふして生界の流嗣
 小あき人の子も胎びゆるを命を傳謝一遍して中ぐて帰り
 去れり叔金鞠ハ三才の女子とてめ子達乳母をかへかゝの如く
 昔音なりゆるふは小見まれあがら令利想のわして四葉の因ふく
 一久と並の子供と立交り筆を揉む文字を去り五六葉は
 うと績の業を習ひ八九才小及びてい文章の道のためとあふ
 おろくころへ加之おは父逸す小孝順あること世間色を為す
 涙を漏さるなり父も只獨り子の事あれば今い漸く父の憂

事をも少忘れ掌の中の玉あざしの華と歩跡免ゆたれよ
 き算がが取むるへく末の末とをもち人そのと終夕をい
 あぐさめりうが近きとりの老女小孫尾の口自とくももの
 金鞠くゆらるる由所男子の所か、ゆきい女流の教ふるも事わ
 けだは子原末思ひあれ、今五六葉をその文づへおひごしあひ
 が連れ女風の有儀のむねのむねと後づとくくくくとおひ金
 鞠ををゆく吾もは事おをさぐらふい何くねどもいづれの清夜
 いづれの君小も人續くまうか、徳めゆとくくくくくく
 人と清づければ刀自老妾ひく、由傍小仕へまゝせし清夜
 今いふ東どの清女とてくくくくくは君の時教公の清夜室君

西城坊の家こけいごやの湯ゆ令嬢れいじやうとてまじりてゐるがけさゆうこの名ハ八重ハ重
 頃がきの真ま奴なをも焼やし給たまひ定てい家か家か隆りゆうをうこの友ともとてけし外ほかよ
 り浦うらの道みちの古こ式しきを精せいしくわてせ給たまひ假かり令れいおえ風ふう狂きやうの遊あそび
 泥ぬ給たまひけし極ごくへさかし給たまひ妻つまよ給たまひ給たまふとていふ
 せんと有あり給たまは金かね鞠ま大だい拾しつび老らう女にょの厚あつ記き愚ぐ情じやうとてお
 まのあひ給たまひまこととよらひけりおたのまけ給たまふとて翌あした日ひ
 於おきまじり起おこ出で表へ後ご調てう度どをまじり精せいしく給たまふ母はは公こうの湯ゆ前まへへ
 ちりりふ小こ尼に公こうもいと清せいしくあふ小こ児にうふ名なハゆらうの湯ゆと湯ゆ
 有あり給たまふ時ときは小こ児に謹じんまじりらとて下した只ただ今いままじり給たまふとて湯ゆ
 色いろども湯ゆ前まへふめとれ給たまふする上うへおぞまじりけきと給たまふべき

名なをも賜たまふゆらう父ちち也なり拾しつびいふ人ひとと稟りやう告こりらふと危あやむも
 志しどおあうとぶるせ給たまへ父ちち臺たいののせ有あり名な案あんの記きとて湯ゆ
 何なにりて給たまふ清せいしくあふ小こ児にうふ名なハゆらうの湯ゆと湯ゆ
 湯ゆ意い小こけし給たまふとて湯ゆと湯ゆ
 半はんおば好この喜ぎ子しとてあふ我われハ別べつ別べつ存ぞんをわづらふとて二人ふたりお世よを
 まかす湯ゆの老らう養やうをわづらふとて湯ゆと湯ゆ
 時とき宗むね遠とん逃にが并なら国くに領りやう吳ご松しょう賜たま恩おん賞しょう
 這こハ其その前まへ逃にがとて復もと元げん叔しやく吳ご松しょうとて盗とう賊ぞく押おし令れい既すでお
 一人ひとりの母ははを想おもへんとてけしとて湯ゆと湯ゆ

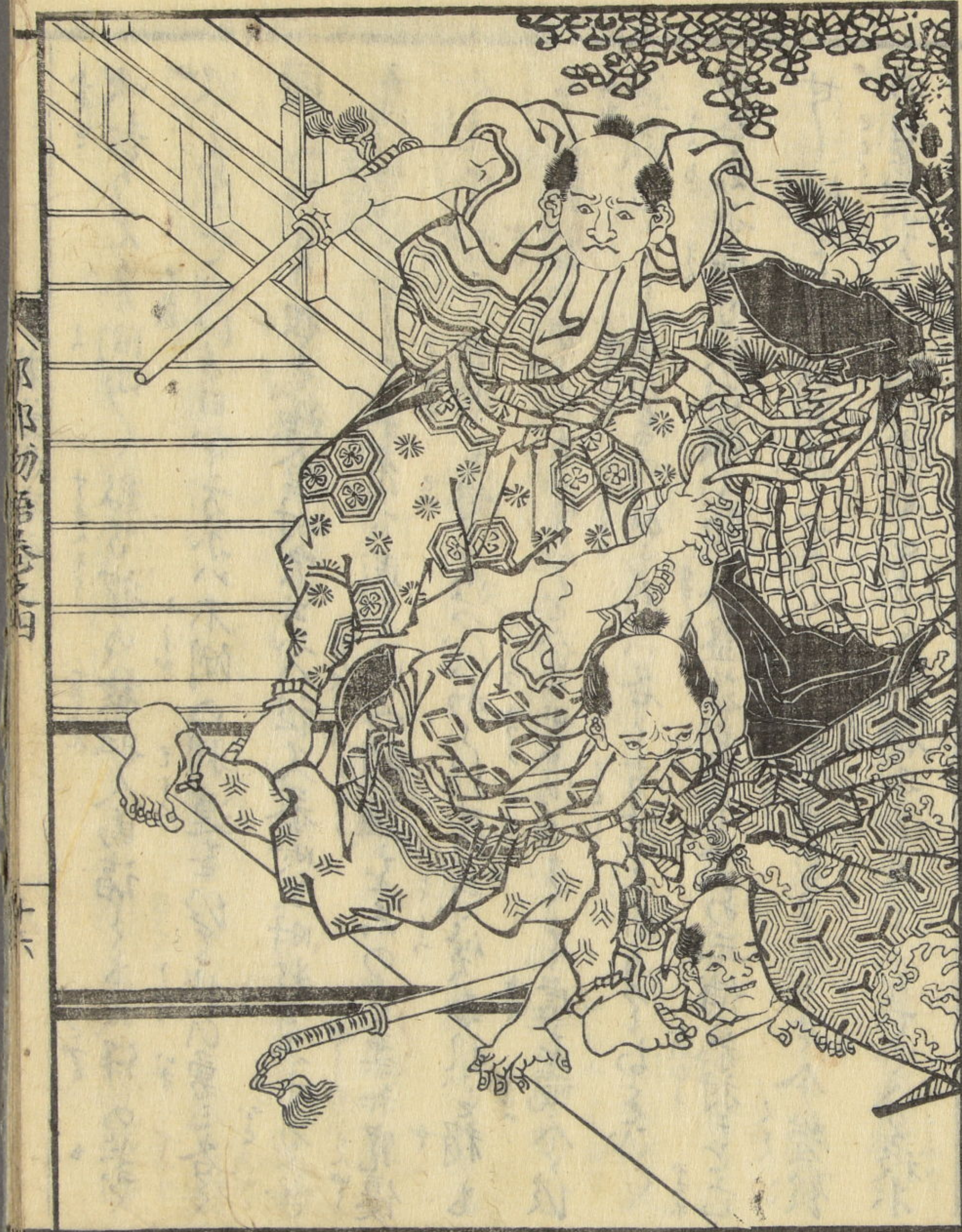
銀の有りけ盗賊ふらへ必く母を奪ひし事すまふれ
 とぞける程小次郎賊も始ど行ふふくしてや袋のたゞ綺結
 十匹一丈も多を下さば公有けある後信一遍して終り去
 此是餘人小次郎本田園九郎宗之があはれとてめてをゆり
 乃の宗之先金鞠逸子より女子を詫かきり乃の後志づ
 く上都より四国九州海を歴どりけるといふども文恵小次郎は後
 の序もかく旅費雜要へは牙小威に頼り人々のふ業もあ
 己が勇敢を憑きて山賊劉益を截たを以終り其魁首と
 ぬりけはれあはるび嫌くは帰りまり徳あがく金鞠小
 つらへたる小児を以今も堅固小次郎ももや十歳

流小次郎ありぬ人とは流石の親を懐舊の情にぞく起りて
 ころころとこおそやのへしるる小次郎ありけりそのゆりてあは
 の事少く今ハ私権の汚裏汚殿尼寺臺小次郎つたれ
 名を後濃とていつて彷彿のふ業ううくく文を記取む
 すべし拙陋うう既小郷なる多花を賣孝子とては尼公
 へ珍しに花を二枝あはせし小次郎後濃を後濃の
 ううをよみよみよみよみし小次郎孝子も想答の返歌ゆりて河の
 介尼公の心を慰めあはせしやその風俗道曾しは後濃見宿
 たり小父のともへ場ら来りて時我あはれを見し小次郎の程
 半二三才小次郎後濃結小はしたのむけ傳帶結ひりけ

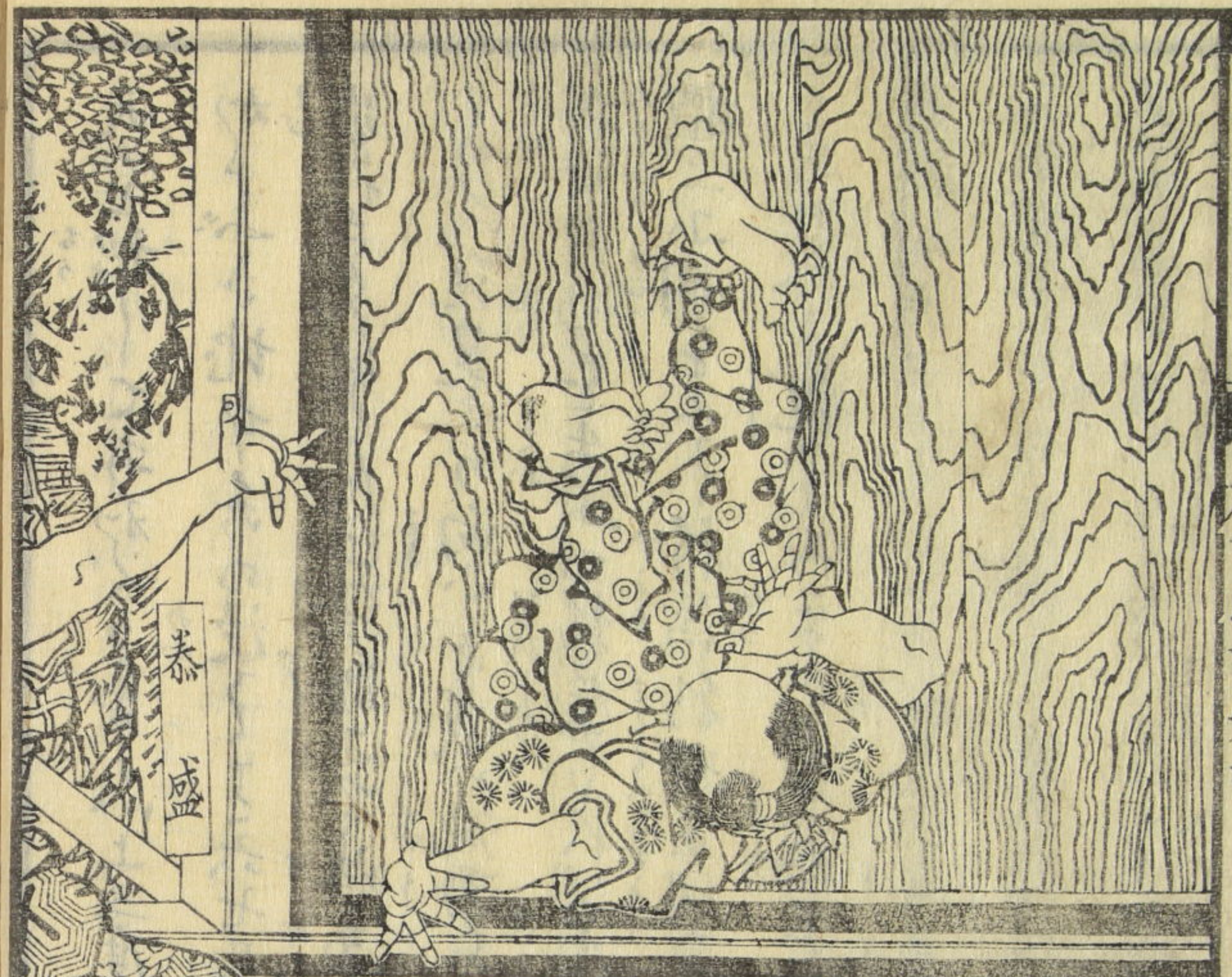
くらさぬいと氣さくも客義並の女流小何げば高川よと
 たり一歌二首も近た以まをそへ居るりしが今い忘れゆり
 とおろそかなくおごころをゆてさしも慕恋の園九節七回へ始
 一面へ悲し居るりしが叔を向ふ呉松が家へ盜賊小今も取で
 ぞしくまきりい這木の因縁とぞもゆへる諸も隙以駒の御
 かとてあくとまほもや私安四邊の春をむる上下嵐の始とて
 於鄙を興下るるるび祝しけりともも角を以て天變地勢止
 げさく或へ天小二つの日輪を照し又二つありびて十三夜の月
 を何とや海水俄小乾枯して地鳴ひく事雷の如く後
 大地震働ゆして江の島弁天の方より大山の壞り如き濤

天を把しておろくる事以上三度佛閣堂舎こらく壞れ
 かぶさ地中多の浸るこ六七尺民屋田園亦く損じ
 崩れぎたやぐんは強動もて性も死傷の色の二万人ふる
 と地へ入死是より向ふを或へ泥雨を降り又へ白晝小燈燭を
 揚日月明を失ふの教屬もれば京師の法山何多ひの敗文を捧
 擅上小烟を上く祈禱祈願止阿ありも上近年唐土蒙古国
 より日本と親しみよ小交物を易せんと居るりけるといへも
 先代時程より是を救ふ毎度使節を追飯けり後不
 のの国の王大軍を修し速小冠伐せんく教万艘の舟を懸し
 只一固小冠破らんときたる小不側あるりも卒絶く百神風

新加坡...

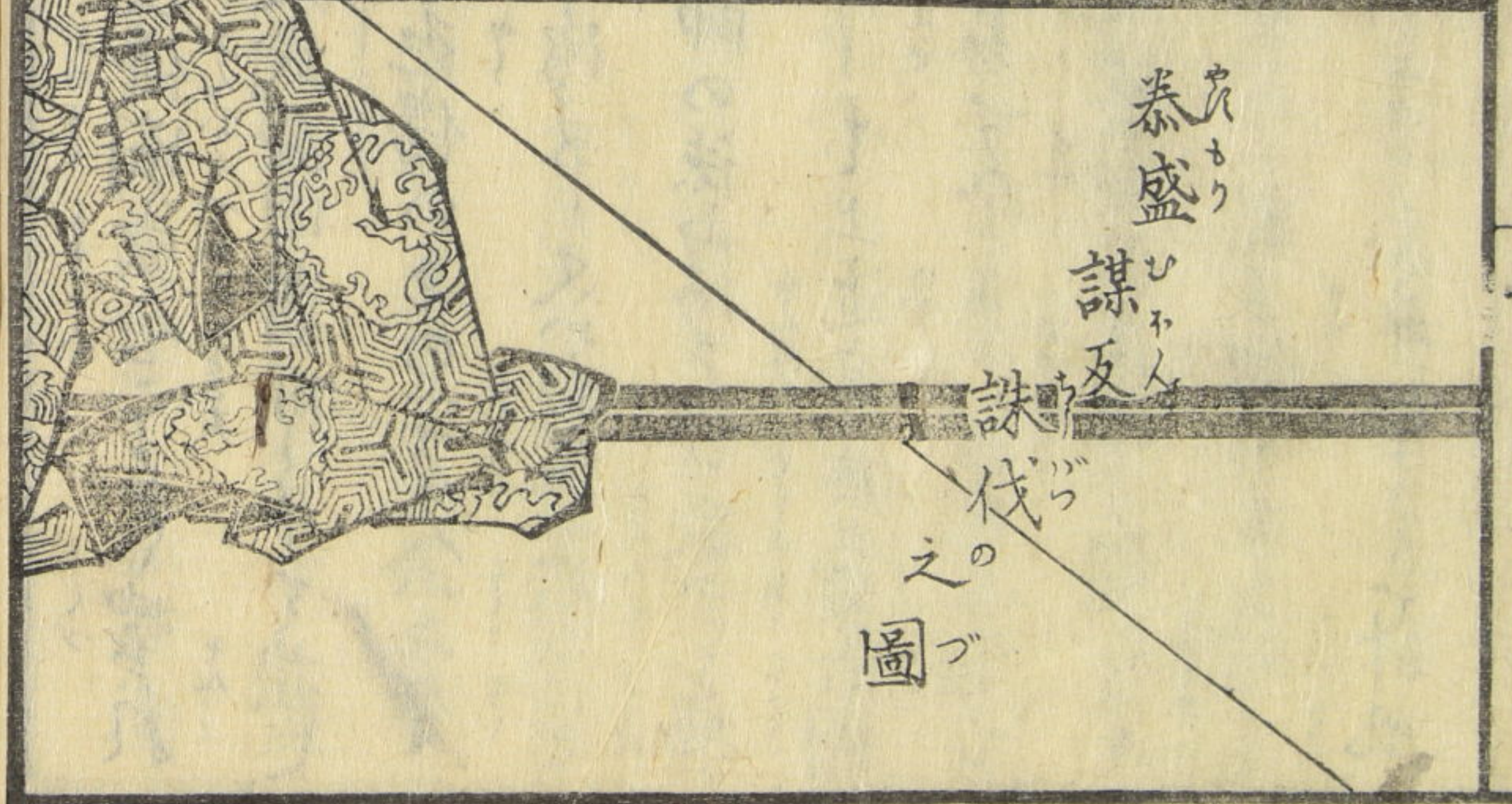


下町の御殿



恭盛

昔面が言者之四



恭盛
謀反
誅伐
之
圖

七

新編物語卷之四

吹起り又々が同少く救万般の款私人馬諸とも大洋の葉々
 びともありて亡はる日方少く不測の利運を以て始り勇々各々
 国へ帰たり扱を鎌倉時宗公小八祖父恭時公時宗公小八方と
 る沙気憤ふして兎角下民を怜み別強を志のぞ柔和寛優
 小一々怒々猛勢を好ま流つべからず沙気憤ふれは稍も
 古れは一族の中小八を尊心を合ふ世のりくも虚を現今以
 宣鼓むり一々怒々猛勢の族も今各々古老よりりくも虚を現今以
 の存意小随守秋田城に助恭盛ふれは稍も三浦恭村と亡
 せし附へし後び其懐ふりく礼讓厳重ありしが其今爰從
 の古老小くも威八方少くも執權小を立すさりて今も從小

公有ともがく各眉をぞ擧げける又京越南六波羅小京終理
 の大捕時国は往密小謀叛小陸道の軍勢を修し鎌倉
 を押斃しみづり自立して京鎌倉の執權たんと合ふ
 し内小て鎌倉へ奏達するものわがくは祖れがも開祖時政
 たり今七代小ありて當時時宗公小おてもさか非分のりか
 く是を攻動さ人半容易業ありひば左とともさか非分のりか
 なく知あさざり月日とさくける中嚮政より時宗公小
 心地例あり針灸彼割をを治りとも是中を化まは
 心勞小氣城將塞して日る小勢力衰へ飲食とも小減りられ自
 は世小久か人事をいさめたりせりともや圓光寺の僧光師

新編物語卷之四

を戒めしめて難發僧形をせ給ひ、是時法名を寶光寺
 庵とを稱しけり。終小同日の黄昏、一逃去あり、せありけり。
 り、終三十四歳と歩へき門葉一族を鎌くくの諸大名の
 系入し、て教を悲しとて、てつて、てつて、てつて、てつて、
 骸へ阿彌陀が峯、赤砂雪の側、小ゆめ、名噴、嫡子、左馬の権
 の頭貞時、今、十四歳ありて、送跡お讀し、て、お軍、惟康、卿、お
 執権たりされば、貞時公、お變たり、およつて、叔父、彈正の、小彌業
 時、加判し、て、屬政事、を、収、め、ら、る、が、け、り、系、於、六、波、羅、の、南、方
 小糸、時、五、宿、小、ゆ、め、時、を、あ、り、と、收、び、居、り、しが、故、が、鎌、倉
 より、使、節、来、り、附、五、親、子、を、召、喚、せ、ら、る、が、終、小、是、事、ひ、と、使、者、と

ち、小、鎌、倉、へ、急、ぎ、け、り、と、ち、石、捕、り、若、陸、の、国、へ、流、し、ら、る、り
 叛逆、力、の、お、ま、憤、り、城、會、と、若、陸、へ、集、り、て、時、国、を、大、將、と、て
 小、陸、道、の、軍、勢、城、廓、を、か、え、運、を、天、下、お、お、叶、は、ざ、ら、因、り、討、死
 して、各、名、氏、軍、門、小、止、め、人、と、企、も、り、て、歩、け、ま、バ、鎌、倉、し、り
 密、小、死、所、へ、人、を、を、り、時、五、親、子、圍、殺、せ、ら、る、が、終、小、一、味、も、力、の、お、ま
 を、今、い、詮、す、べ、き、業、お、く、終、小、ま、ま、へ、お、親、お、り、ら、る、と、お、親、
 て、秋、田、母、の、助、恭、盛、は、往、り、親、子、依、り、七、日、夜、奢、修、橋、漫、り、て、人
 を、人、も、も、思、つ、て、終、小、道、達、し、て、法、令、を、破、り、式、目、を、叛、民、百
 姓、を、く、り、り、け、り、が、近、曾、已、小、時、宗、公、を、叛、者、し、を、時、宗、公、来
 あり、と、一、味、の、族、を、被、殺、し、し、き、り、小、使、使、の、隠、防、ふ、り、と、ま、り、既、り

けり事更夫の尉状強看破さうさうつがうんいしき自時公の御定所へ松かけれ
 ども是と方せりいぢりこ建持ちぢりもあつて踏若ちぢりしておろしけりちぢりこの若松
 ろ婿男飯沼判官再び証席しやう小つへく証へたる自時公このも
 今の若松このべき小つへく守くつぎて究竟の武士百餘人をとくこのひ堂中の
 隅くまく小込このを恭盛父子このを召めりこの小天保この遂つぎれこのがわ事人
 何なにもあつて進しんままををおおりりひひけけああつて究竟このの力士このもも四よ方はより立
 起たりて乍はち恭盛この親子この謀殺このしお供このもも存ぞんずぞんををここく
 返捕へんしして一味この与力このの們この召捕このを謀伐この既この十分このありこのは強動この隨
 分ぶん隠便こののこのととううひひありありししとと不ふ因いんのこのふふてて惣倉このの倉生この市人この卒そつ不
 將倒しょうたうして金銀資財このを拵この運このび西小東この小逃迷このひ老女の男女この途この途この

失うひ泣喚このぶ身この凄このしくこのとと哀あれれるる上この二回この擾この乱この
 何なにも多た敷このととくく土炭このわわるるししみみ或山この小隠このれれ拵このおおりりて
 身をこの挽ひれれるる面このへ自このらら市中このの街この一この隠このの塵この垢このととありあり家このをこの六この六この
 つつねねららるる中この間この毎このくく小野この多たを生このしし或このは焼この亡このしして噴この涼このくこの於
 原この形このととかりかりて元この小復このするるの移このありあり是このをこの悼このむむてて因この形このととりり以
 来この攻戦このを好このむむが今この自時この公このもも昔この怨このを合このてて這回このの恭盛この謀
 反この七この密このにこの謀殺このをこの加このすすとと此こののこの怨このれれががままああつつててのこの發動このししてて形このとと
 執權こののこの歴このよりより隠便この治政このの觸この状このをこの色このしし災民こののこの残賊このをこの施この
 元の家この居この小このをこのああけけりりととりりてて大この小感腹このして或このは祭袍この
 をこの修このしし市店このをこのひひつつたた自このらら流このをこの薄このくくるるの市中この元このありあり



呉森
 賊
 忠九良
 救小園



新古今物語卷之四

若面抄卷之四

多かりは強擾小治れ令欲強悪の誘育て人の金銀資財を掠め
 取て俄小徳付己が榮耀榮花小治る族女あわす又押あそ
 たるものども是を致さ然りて自國の汚形へ新なるもの
 多かり是未の目前の長悪あれは欲賊をさせし能はあらく
 制罰を加へ資財を根元へ掃し奪ひけるは小民路を直
 を仰だ始づる根をこそか武士の下給甲乙雜兵の警非分の
 ろひをせしめられしは至者ありしうらされく犯し掠む
 の患ひも止あさかち中ふ八九人あかり黨をなすび一賊を捕へ
 罪科裁りて死罪し併せられたる中ふ人いまごそ科死罪し
 決せざらもの有しゆへ程も國圖小繫はてしをれつを治るふ

先達て花賣吳松とてその家へ裏構の戸を切り破り銀
 戦をとりて踊り込金銀をゆきける付ハ汝ホころくく一又下に
 命をたはさる人と威しころむさゆしる外ゆへ程も新小遠
 いざら付ハ先規より制禁の加条あれは死罪逐さるべしと種々
 沙查斐者せらるるといふは免角流るは祥うあはれ自時公が先
 祖のころぐ小校ひて仁慈を克優の由生優あれを萬望渠助
 こべき罪あふ助けはせんとおがし給ひぬれども政道の憲法
 了宵たがくく別花賣吳松といふもの他録部へ押つるなり所
 内を向ぶと中し人こそその所をつらさるるべき頭人傳をひて出
 たら別他録部の處にお弟の役三十歳修りの男もふ小ふ不

若面抄卷之四

十一

禁しんめられ有けりを見れば這向夜盗小押入たる賊あれば呉
 松内心小驚く見僅で浮緒して有りる小貞因云呉松く清乃者
 々のいはその先に汝が家へ押込夜盗小入るよう少つてへ一す
 種を查察を遂るといどもいまも白状小及びは是小らりて汝を呼
 出して同じきく免がば詳く小まも黒白を分と人と扱をせる所に
 ありと信なればも阿呉松情おのひけらは成先達我家へ賊
 小押入しるの小後れなしといども既先達より立派れる副達
 十二ノ束の中押込れ入の登賊は人まお小柱を怨たしてい
 ども白刃を振りて札入る族罪の輕重を札さび死罪らんき
 の清定目あれば今我一言の下小はしもの一命を落さん事まさるに

あのぶ小後がら而ありまれば我彼をある小をお公法巧とてを
 脱人ものと言ふあらりる上小平伏あり者々も呉松わしを
 握ぐて稟告らるは後極の清真申おれ入く信れもを信る人身
 家へ押込盜賊小令く白刃を振らるをいふかも是をいふ事も
 面体小又見有べきともいふは今他の家と言ふ遠てい
 へんら私小おのてさしは是約仕らる所ありと告上たれば貞時公
 修有けら汝一身の徳村小人の一命を救いんの知らしべを
 氣健ある了簡感ずる小足りといふも上憲法の政通札に
 したらば下教誨ありしむる事終らば汝が宅へ押入らるといふ白
 小知れらる上へ包こ隠はるかく得小中をいふ事も請問

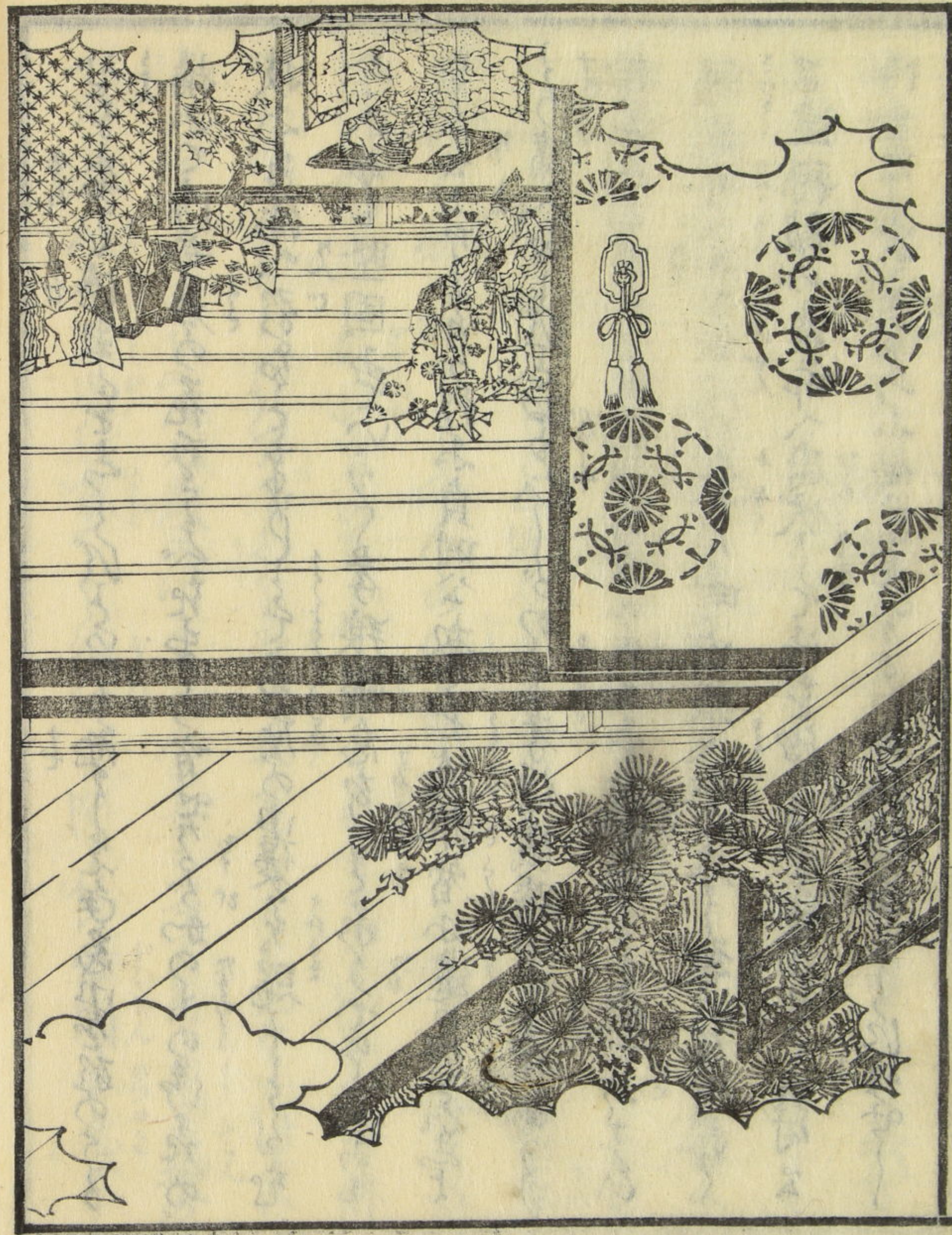
何れをけるも其松し今ハ脱れがく有のまゝ稟告人といふ事い
 しかども又よく思惟して今一急務とらんものともありて上
 々の所をのれおれへといふか極き事とらん事をゆていへ
 上べたまとも失念仕りて只今おるひの極悪をとうじりて人
 徳女伴近曾のことありしが亡又逢田の佛車を執り人として回
 音の人を五七人招て念佛供養をせりしやうたれりて
 各々凶宅せりしが夜亥の刻をうりに母我身門の居し
 城歩志れぬはしが夜中かふそのとも志れどもあびりてお
 掠人となかす伴子といふ極き風身目とさききく知久入る
 賊よりく二三回お母ひりておればおむらわらうけせやうの賊

忽ち門邊をくして逃がるがさるおてもめつあるをれも掠め
 去け人とよくよく改めとけるお一匹をも掠りて逃りけるま
 町内の眾人へも届らばおろしとゆりしがその時小令を賊にその
 人を人々かち一瞬のまかれば原よりその面件見備へてその
 もゆりのび是より他お告を人言もいつびと後客としててそへ
 ければ貞時公稍黠しておりるが今其まは返答迷うゆて
 道理一遍く色とりけまはる修出さくハ盗賊の查點汝が返答
 の一言おて迷ひを解ふ足ありけ上うくがすく重刑を賜へ
 るハ仁改のゆまがう所あり汝が告状はらおを修へけけりて
 汝有く事なあくはく帰宅をせむけるは是よりてうの

賊婦あまの危あやきを逃のがれは是こゝに吳松ごそうが二に回まわりあつては我われへ知らせ
 貞まこと時とき公こうは後のちに吳松ごそうがけしめをさすお今いまは時務ときむの下したへ
 こゝに賊あしを助たすくべし言ことの稟りん演えん門もん戸この端はたりをお忘れわすれ臥ふさるゆへ
 時務ときむを奪さらりわすれしその傷やみ不良ふりやうの心を救たすめ給たまへ
 是こゝに答こたへられ逃にげせしとの返へん答こたは死し罪つみの中なかに
 押おし入いり助たすけしせん仁にん心しん頗すく感かんずる小こ僧そうも有ありしものつ
 ねぐお今いまあるけしめものあるや密ひそかに會あはせしとて後のちに
 の小こ役やく人にんお命いのちに助たすけしけしお今いまは日ひ具ぐ小こ僧そうも有ありしものつ
 け吳松ごそうとくももの八九はち歳さいの時ときより一人ひとりの母ははを中なか
 小兒こゝろおて花はな草くさ葉は皮わを售うてし活かつ計けいを逃のがし夜よの学がく問もん筆ふで跡あとを

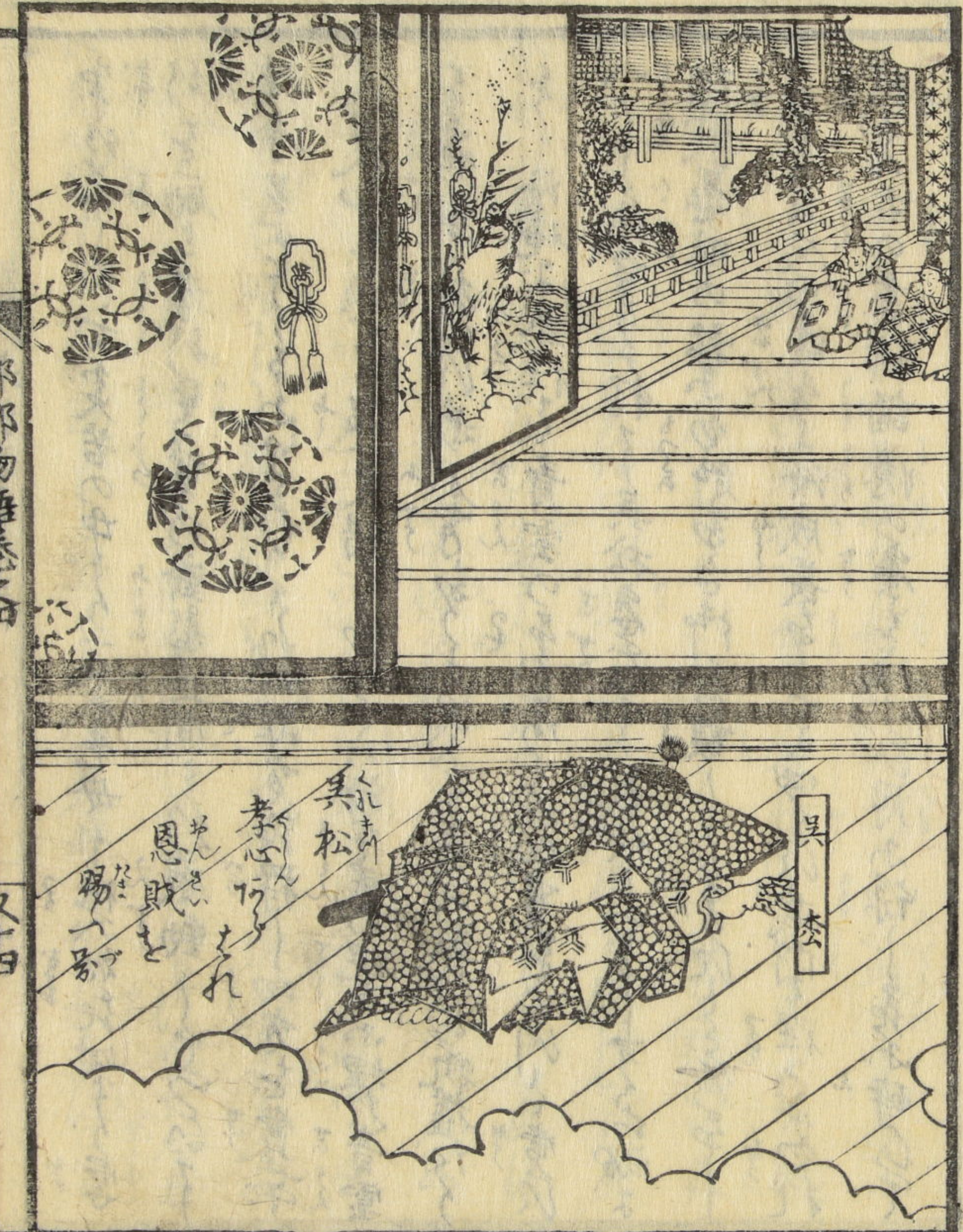
心を奪さらり倦う事じを志しすべしとて先まに忠ちゆう告こくを
 構かまへて時母ときはは君きみの花はな百ひゃくをばしし事ことの有ありしものつ
 枝えだ小こ僧そうへ影かげをばししとて南なん唐たうの由よしを賜たまはしし
 今いまお母ははも堅か固こをいし孝かう娘にやう懈け怠たいを承うけし
 おく上かみ上かみやうしし経きやうお貞てい時とき公こう叔しやくを推お推お智ち小こ遠とんり
 より庸おとこ人にんお今いまはとわししとて孝かう悌てい儀ぎ膳ぜんの士しを村むら鄙びり
 捨す置ち人にんとまししに泥どろ沙しゃの中なかの名な玉たまも比ひしとて
 評ひやう定てい亦またへ君きみの女め人にんの原もとより町まち内うち頭あたま人にんも各おの々おの大おほく
 子こ速すみ縣けん鼓この意い前まへへ府ふ伏ふくして後のちを物ものたりし
 時とき母ははおて吳ご中ちゆうの小こ向むかせ宣のたまひしとて汝なん俺おれは薄うすくしに後のちに

145
4412
4



都面物語卷之四

十四



都面物語卷之四

十四

呉松

孝心
恩賤
賜一
号

事終るトて冥苦の中より二人の老母ははへ細記何より學
 術を勵と孝行を修の動靜世間之れ感動してつひ
 俺今是を以てらば罪有後得一切有を賞す
 人の民を以てらば彼人惜しむは汝下民の泥土に埋れ青雲
 を舞事終るに我不育ありとてはも何討伐の執權たり
 汝俺を奉仕す青雲の星を何く切有をも川に當り
 べしと終有る終る吳松を愛ありあ伏しをすしすの誠を
 陋賤愚昧の私勿辨むと清急報しとすはにと終る
 汝の父の遠くは汝成長ありても汝は武門に仕る勿れ
 汝の古の書誦誦憶の塵をうへひ月お録と死お研しと

塵俗の中夫アとて欲念を棄騰は孤山の月を海に
 必し以てを獨り世の名利を售り欲情を去る事ありれ
 と汝く終るありれを今おんは歩く一人の母を根の中
 をうりて汝の價を口を報してそ冥途を厭はれ又我
 今又お主を求めてお戦あるとせ一人の母ありとを以て
 主家の乃よ一命を捨てる徳女我のこおつて漢士たり人お
 公四海をれありありとつへも元来の臣家の又母ありと
 忠義を捨るは終る汝を嚮して孝を汝すも人お
 仕管の人へ忠孝全うしむ是れ哀むべき事なり汝や只今君
 の恩心報する事ありとつへも一人の老母を救うは汝父

古今の語彙

者前跡詩卷四

まじく向のどくく送を穉しなるもされおもむもつらん法賢奉
 庶幾所ありけと僅く十上らふ貞時公清成をすくくおれ
 世の采利名聞の望おれ隠逸の君子なりこれを進めてめ
 仕人事却て集かざるを累しむるものことおがめいあて
 後有らるるゆゆ博學曠才の身けりて貧賤を甘んじ世は
 欲情を嫌しとおよこておれ隠者の多りたる穉ありふも
 けすゑとも母小孝狼を重し世を潔くする子べし是れ憂人
 當座の引ふもそのくく未十石文選といふ書を外教多の珍
 き書おびも五添下賜書吳松教りの涙おがさられ下贈
 今殿の清厚情を背地もろれとあり不遜の乱言おれ

かしく剝粟米一石清成の清書典まで教部下賜る余宅お
 小臣が一身小溢れ息射限りおくぞんども誰今清仕ら辞
 ちろくつへどもそ我母百歳の没後いぬ守市門言ふ事りて
 大馬の勞を重ししとんと頂戴のふくを収め徳て我が入後
 つらる



都鄙物かこり巻の四終

都鄙の語

